

里地通信 3&4月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ： <http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

会員紹介 企業緑地からみた里地 進化する企業緑地研究会

原口真（はらぐち まこと）
株式会社住友海上リスク総合研究所

私が事務局を担当している<進化する企業緑地研究会>は、企業活動に係る緑地保全や環境創造のあり方を研究している9企業と1NPOによるグループです。私たちが<企業緑地>と呼んでいるものは、工場緑地やビル緑化など事業所周辺の緑地をはじめ、海外植林・国際緑化、企業法人が経営する農林地、自然保護活動を行うNPOへの助成、寄付行為までも包含する概念としてとらえています。

自治体が工場誘致を行ってきた里地地域には、企業緑地がたくさんあります。里地に立地した企業は敷地に余裕のあるところが多く、市街化が進行している地域では、いまや貴重な緑地となっています。ヘクタール単位の面積があり適度に管理されている里山林が、企業が所有していたからこそ残っていたというような状況も見受けられます。

ところが、こうした企業緑地は地域の資源としてほとんど活用されていません。いろいろな理由が考えられます。工場の地元採用の人たちにとって、こうした空間は子供時代に豊富にあったため、いまの子供たちにとって貴重であることが想像できない。地域開放をしたいと考えてもどのように働きかけてよいかかわらない。業務時間中に外部の利用者に対応している時間がない。事件や事故のリスクはできるだけ負いたくない。

い。地域の人が企業緑地の存在を知らない。などなど。

研究会では、こうした状況を改善するための研究を行っており、発足当初から里地ネットワークにもお世話になっています。学習会の第1回の講師にネット発足準備中の源氏田さんをお呼びしたり、このネットワークを通じて知り合った小国町や赤目の森にも見学に行きました。個人的には、KOA森林塾にもお邪魔しています（劣等生ですが）。

大きな企業が立地している里地地域では、良くも悪くも企業の影響力は大きく、パートナーシップによる地域創造活動に企業の参加を得るためのしくみが求められていると思います。

ISO14001規格の発行をきっかけとして、企業の環境意識は目覚ましい速度で改善していますが、生物多様性の保全や原風景の保全といった側面へ目を向けている企業はほとんどありません。ひとつは、こうした側面の重要性が企業人に伝わっていないこと、もうひとつは、企業にとってこうした課題に取り組むことが魅力的に見えないということが理由だと思われます。緑地に対して企業の多くは、二酸化炭素固定源として過大に評価したり、どんな緑でもただ増やせば環境が改善すると考えがちです。

研究会では、緑地に対する企業のこうしたバランスの悪い見方を整理するためのツールとして緑地評価マトリックス ECOLAM（エコラム）を開発しました。これを用いて企業緑地を見直すと、生物多様性や原風

景、地域とのコミュニケーションなどの重要性も認識できるようになっています。お金や人材を投入したことに対する効果を評価をするという企業経営に求められる面にも対応しています。またこれによって、自主的に頑張っているところを適正に評価して社会が認めあげることにも可能になります。

環境創造のプロセスは、現況把握 方針の設定 モニタリング 評価・改善の繰り返しですから、現況把握や評価に ECOLAM が一役買えるものと思っています。

最後になりますが、里地ネットワークの原田和央さんが退任して4月から社会人になると伺いました。学生時代から NPO の運営にかかわって深く広い視野をもてるようになったのではないのでしょうか。学生のためににこうした機会がもっと増えればと思います。

原田さん、ご活躍を！！

< 進化する企業緑地研究会 >

- ・富士見グリーンエンジニアリング
(日本ビオトープ協会会長)
- ・アジア航測、
- ・日揮、
- ・住友林業緑化、
- ・杜若園芸、
- ・国際航業、
- ・水道機工、
- ・ソニー幸田 (ISO14001認証取得国内第1号)
- ・日本野鳥の会、
- ・住友海上リスク総合研究所 (主宰)

(2000年3月現在)

ウェブサイトホームページ

<http://www.ecology.gr.jp/eis/index.html>

電子メール haraguchi@smri.co.jp

ごあいさつ

2年間、どうもありがとうございました

2年間、アルバイトで事務局スタッフをしていました原田和央です。

今春の大学卒業とともに、測量関連の企業に就職することになりました。よって、里地ネットワーク事務局スタッフとしての業務は2月で終わりにになりました。

全国各地の皆さんの新しい取組や熱い情熱、美味しい食べ物に出会えたことは貴重な経験であり、つくづく幸せ者であったと感じます。たくさんの方にお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。考えさせられたことはたくさんありました。皆さんの前向きな姿勢がとても印象的でした。2年間があつという間で、とても楽しかったです。

発足直前に右も左も分からないままいきなり竹田さんを訪ね、事務局業務に関わらせていただき、不手際が多かったことは深くお詫びします。

仕事と里地ネットワークとがすぐには結びつくかどうかはわかりませんが、今後とも里地ネットワークの活動には何らかの形で参加していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。皆さんに負けないよう、これからもパワーアップを図っていききたいと考えています。

今後もどんどん皆さんの取組が広がっていくことを期待しています。

(原田和央)

原田和央さんは、設立前から事務局を支えてくれた力持ちでありながら、素敵でかわいらしい女性です。一度は社会にでて修行をさせようという親心で、父役の竹田純一と母役の源氏田尚子は、考えてのことです。「早く社会勉強して帰っておいで...!」と本人を送る訳ですが、各地で会った折には、よろしくご指導の程お願いいたします。ちなみに、原田さんなき後は、人員を倍にして彼女の穴埋めを行います。不手際がありましたら「なおちゃんがないんじゃ、しょうがないか!」とご容赦ご寛容の程重ねてお願いいたします。

(竹田純一)

里地ネットワーク報告

(財)イオングループ環境財団の里山保全事業 愛知県美浜町「里山カーニバル」 竹炭づくり体験ツアー報告

2月11日～13日、愛知県美浜町で「里山カーニバル」が開催されました。主催は、美浜町、布土まちづくり委員会、(財)イオングループ環境財団と里地ネットワークです。このイベントは、美浜町の里山一体に生い茂り、手入れをしなければ既存の植生や神社の社(やしる)まで影響のでそうな竹林を、少しでも、市民参加で手入れをしていこう、そして、単に手入れをすることだけではなく、切った竹で炭を焼き、この炭を水の浄化や田畑に活用していく、さらには、竹でできる楽器や道具をつくることで、楽しんで里山保全活動を行なおうというものでした。

11日のメインイベントには地元の人、主に愛知県の子どもエコクラブの少年少女たち、中には東京や群馬から来たという方々もいて、総勢100余名が集まりました。このレポートでは、里山カーニバルの体験を中心に、美浜町の里山保全活動、竹のこと、炭のことをお伝えいたします。

竹炭をつくろう

名古屋駅から私鉄急行で約1時間、伊勢湾と知多湾にはさまれた知多半島の先の方に美浜町があります。伊勢湾よりの野間地区には、水田やみかん畑が広がり、地区の共有地には竹林や二次林が手入れをされて広がっています。共有地の山神様をまつた社のまわりはみごとな竹林で、そのすぐそばに炭焼き小屋とコミュニティ広場がつくられています。

2月11日、快晴の空の下、たくさんの大人や子どもが集まってきました。最初に、炭焼き名人の布土地区で炭を焼いている百合草さんから話を聞きます。本当は、竹を切り出してから窯に入れ、火入れをするのですが、火を入れてから炭ができあがるまでに2日間か



かるため、あらかじめ用意されていた竹を使って火入れを行い、午後に次の人のために竹を切る作業をすることになりました。

竹炭にするのは孟宗(モウソウ)竹です。3年から5年ほど育った立派な竹を使います。竹林は毎年春にタケノコが収穫できます。ところが、きちんと手入れをして管理していかないといいタケノコを毎年収穫することができなくなります。昔ならば竹を切っているような道具に利用していましたが、今はプラスチック製品などが使われるためあまり利用されません。そこで、地区の人たちが竹炭を作って利用することを考えたのです。

お話の後、さっそく、長さ70センチほどに切りそろえられた竹を、みんなで窯の中に入れます。窯の底から上の方までぎっしり竹を詰め、鉄のフタをしてから、その上に練り土で封をします。無事にいい炭ができるようにお酒と塩を窯の上にささげます。

窯の口に薪を入れ、子どもたちが火をつけます。火はしばらくして窯の前の方でめらめらと燃え上がり、やがて奥の煙突から煙が出はじめました。

おだやかな森のなかで、木のおいや、風や土のおいにまぎって、木が燃えるにおいがしてきます。少



しすっぱいようなにおいもします。竹が蒸し焼きのようになってそこから竹酢がでるからです。でもいやなおいではありません。いろんなにおいが混じり合っていて、わくわくするような、楽しい気持ちになります。

お昼ご飯は、近くのコミュニティ広場で食べます。たき火を囲んで用意していただいた甘酒やお茶、みかんをいただきながらそれぞれお弁当を食べました。

午後からは、力仕事です。いくつかの班に分かれて竹林へ出発。大人たちが、大きな竹をノコギリで切りたおし、70センチほどの長さに切り出します。それを炭小屋の近くまで運ぶのが子どもたちの仕事です。切り出した竹は、大きさに合わせて竹割り機で4つ割り、5つ割り、6つ割りにしていきます。割り出した竹は、節をナタで削り、炭窯に入れやすくします。最後に数十本ずつロープでしばってできあがりです。

竹で遊ぼう

大人たちが、ナタで作業を続ける間、子どもたちは竹の端材を使っただけの楽器や竹とんぼづくりに挑戦。『親子でつくる～竹でつくる楽器』や『縄文生活図鑑』の著者で原始技術史研究所の関根秀樹さんが、東京からかけつけてくれました。関根さんは、日本や世界中にある竹の楽器をいくつも教えてくれます。

竹の筒にひとつ穴を空けただけで、ホラ貝のような音がでたり、ふたつの竹筒を両手にひとつずつ持って、地面や丸太に打ち付けるだけで和音のような不思議な音がでてきます。慣れない手でノコギリや小刀を使い、自分で楽器をつくってみました。森の木や竹を使ってつくられた滑り台や滑車で遊んだり、夢中で遊びました。

美浜町の竹と里山保全

自然豊かで温暖な知多半島ですが、ここでも開発は進んでいます。山を追われたタヌキやキツネが人里まででてきて交通事故にあうことも少なくありません。美浜町は、知多半島の中でもっとも昔からの森が残る町です。美浜町では、町ぐるみで森や里山を守るための取り組みを続けています。そのひとつが竹炭づくりです。

美浜町では各地区毎に18カ所と野間中学に1ヶ所の合計19ヶ所の炭焼き窯が町によって設置されました。目的のひとつは、よいタケノコを収穫するために竹林に手を入れ、適度に伐採していくためです。人手の足りない竹林の管理を、竹炭をつくることで解消し、竹炭で経済的効果を上げようという意味もありました。しかし、効果はそれだけではありませんでした。高齢化が進む農村部で、老人クラブなど高齢者が率先して炭焼きをはじめ、地域の子もたちとの交流が生まれたのです。そして、今回の里山カーニバルのように地域内を超えた交流まで生まれるようになり、地域が今まで以上に活性化はじめています。



炭焼き窯をつくろう

今回の里山カーニバルは、11日の竹炭づくり体験がメインイベントです。そして、13日にできた炭を取り出しますが、その午前中には野間の森を楽しむ自然観察ハイキングを行いました。それとは別に、炭焼き窯をつくるイベントが布土地区で行われました。

昨年、里地ネットワークが美浜町布土地区の人々とともに地元学の実践を3回にわたって開催しました。



あるもの探しを行い、水の経路図や地域資源カード、地域資源マップをもとに「おもしろ布土マップ」が完成し、最後には地元での発表会を通じて、布土の魅力的な風土や地域の取り組みをあらためて地元の人たちが「再発見」しています。

このときに会った杉浦剛さんは、10町歩の田んぼと4町歩の畑を行う農家で、農薬や化学肥料をできるだけ使わないとりくみや蛍の里を守る取り組みを続けられています。

今回、布土地区の炭焼きクラブのメンバーが備長炭も焼ける本格的な炭焼き窯をつくり、交流の拠点にしようとして計画しました。そこで杉浦さんが自分の土地に窯をつくることを提案、里山カーニバルの一環として炭焼き窯づくりを体験することになりました。炭焼き窯の名人・長野県飯山市の斉藤昇さんに指導していただきながら、素人集団が窯づくりに挑戦します。

まずは、場所の選定。水が近くにあって、それでいて窯の設置場所は乾いていることが条件です。農道に近い山の斜面を6メートルほど削り、指導に沿って上から見ると壺のような形に掘りとっていきます。その後、掘ったところに石を積み上げるのですが、たまたま古い瓦がたくさんあったので、こちらを利用することにしました。

ポイントとなるとところに石を置き、周囲の土に張り付けるようにして瓦を積んでいきます。瓦と瓦の間には、土を叩きつけるように貼っていきます。そして、



入り口や煙突口をつくります。上の方は木でお面と言う名前の梁を編んでから瓦を組んでいきます。さらに土を30センチほど瓦が見えなくなるまで塗りこみます。この練り土も、長年畑として使ってきた土地の下の方にすばらしい粘土があり、これと、山の表土を取り払った下にある安定した良質の土を混ぜてつくりました。この混ぜ合わせで踏み練り上げる作業が大変重労働でした。13日には、窯を乾燥させるために一度火を入れ、中に組んだ梁なども焼いていきます。このとき、予想以上に温度が上がるのが分かりました。石ではなく瓦で組んだことや、練り土がとてもよかったのでしょうか。指導していただいた名人の斉藤昇さんも驚くほどのよい仕上がりだとご自身がびっくりされていました。すばらしい備長炭が焼けるのではないかと今から楽しみです。13日には窯の前の方に木で組む雨よけの作業小屋もほぼ完成し、あとは、近くにつくる簡易トイレの設置ですべての作業が終了します。

14日には、第一回目の火入れが行われました。16日にははじめての窯出し、続けて窯にウバメガシを詰め19日に第2回目の窯だしが行われました。

2回目の窯だしで、既に、金属音のする立派な備長炭が一部焼けました。

これから、火入れを重ねる毎に窯が安定し、また、窯の具合に慣れて、きっとどこにも負けない立派な備長炭ができることでしょう。再訪が楽しみです。

お勧め図書

自然・経済・人が好循環する中山間地域
NIRA 政策研究 2000 VOL.13
NIRA（総合研究開発機構）の2000年1月号では、中山間地域を様々な視点から研究し、特集を組んで

います。
事例で取り上げられている中では鳥取県智頭町（都市生協との交流）や北海道自然体験学校NEOS（北海道らしいエコツーリズムの展開へ）等、里地ネットワークでも関連のある地域や団体があります。

白炭窯の作り方(布土地区編)

場所の選定

傾斜地の特性を利用して、掘りこんでいくことのできるタイプ。石がほとんどなく掘り進むのに容易で、しかも窯づくりに適しそうな土で材料の確保の点でもよい場所を確保できました。

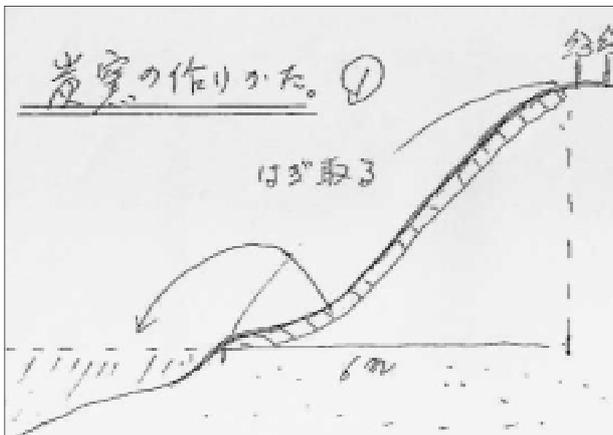
当初設置予定の場所は水がでるので、それより数メートル上を選定。

作業場所の整備

道路から窯設置場所までは水が出たり、粘土質の土壌のため、排水作業や粘土の除去、若干の搬入路の整備が必要でした。また、炭焼き作業をしやすいように、炭材の搬入の容易さなど作業環境の意識しての整備を行いました。

表土の剥ぎ取り

葉や根など腐食するものを多く含んでいる表土はけずり、作業広場確保のための埋め戻しに利用しました。



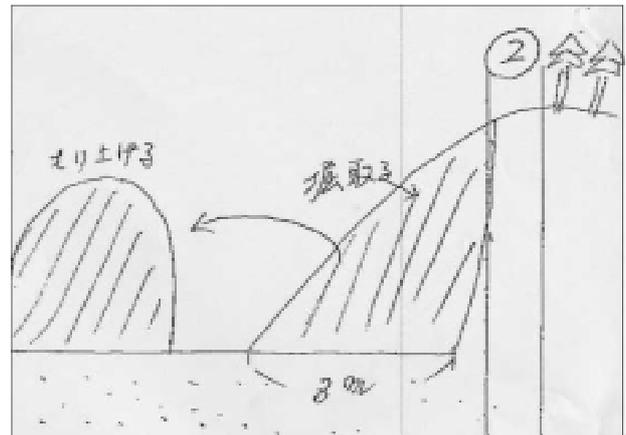
掘り取り

表土より下は石が含まれておらず、しかも若干粘りけのある土で、窯の土練りに適していました。この土は窯づくりの土としてよけておき、後に使用。

土こね

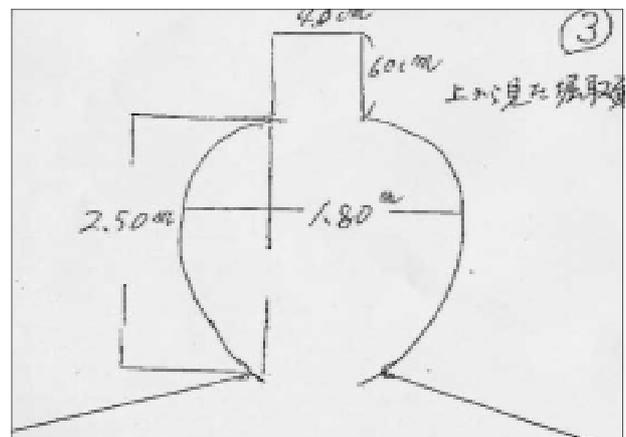
掘り出した土だけでは粘りが出ないことを懸念して、粘土質の畑の土を混ぜ、粘り気をだしました。こ

うすることにより、乾燥したときに強度を増しました。



穴の成形

掘った穴を上から見ると、床面は奥行き2.5メートル、横幅が一番広い所で1.8メートルのリング状に成形。さらに、それに煙突の設置のための穴が奥行き60センチ、幅40センチほどで成形。床面は煙突口が窯口より10センチ低くなるように下り勾配をつけました。



瓦サンドイッチづくり

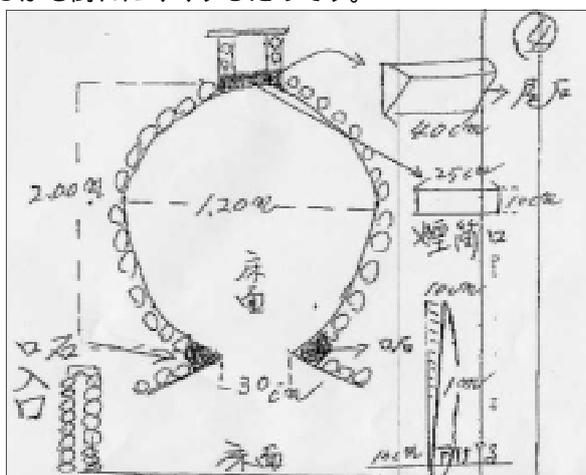
こねた土をつなぎに瓦を4枚重ね、それを1セットのサンドイッチを作りました。

サンドイッチした瓦置き

掘った穴の縁に、瓦のサンドイッチを1セットずつ置いて行きます。1周めぐってその上の段は、半分ず

らして下段の2セットと重なるように置いていきます。置き方は縁の窯の内側になる面が垂直になるように積み上げて行きます。通常は、100センチほどにしておくと、一番最初に空焚きしたときに土が締まって10センチほど低くなり、90センチの炭材を立て込むのにちょうどよくなります。ただし、美浜の土は粘土質を帯びており、通常より収縮しそうだったので5センチ多く積みました。それでも場所によっては若干低くなってしまった所もありました。

煙突口近くでは、若干奥に向かって天井部で10センチ奥へ傾くように積んで行きます。これは立て込みをする時に、自然とゆるい角度がつき立て込みやすく、しかも倒れにくくするためです。



煙突づくり

土を掘りこむことによって容易に傾斜をつけられ、石でその周囲を固めて行きました。煙突口は、10センチの高さを通常なら石を組み合わせて形作るのを、今回は、石屋でそのような形に切ってもらったものをプレゼントされたので、容易につくることができました。

煙突の噴出し口は「尾あな」とよび、蓋をする関係から、平らにする必要があります。

床面作り

側溝の蓋やブロックを利用して、隙間には土をつめて窯口から煙突口までを平らにしました。

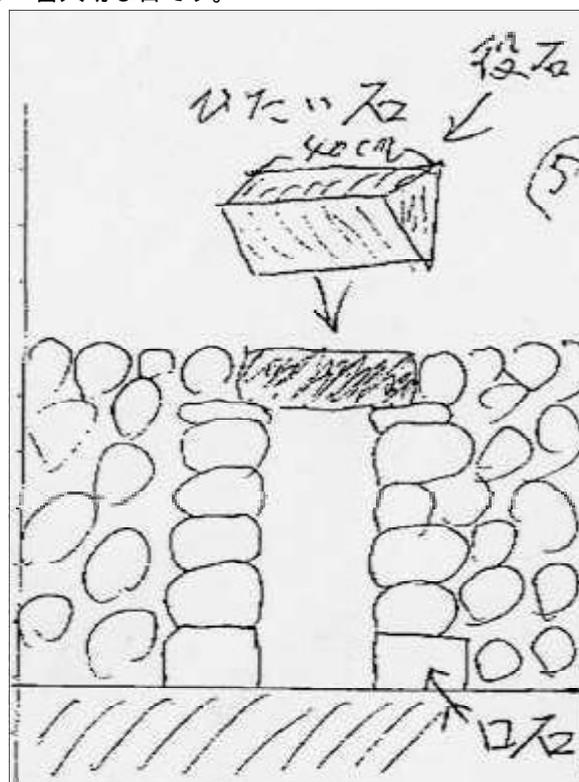
入口づくり

窯口は一番力がかかる所なので、崩れないような工夫が必要です。まずは「口石」と呼ばれる石を窯の前面が八の字になるように、窯口の左右に置きます。こ

の「口石」は熱に強く長方形で安定しているものが望ましいとのこと。今回は、「口石」を含め、窯口はすべて大谷石を使用しました。窯面の八の字の角度は、まったくないと窯壁が崩れる恐れがありますし、またつけすぎると作業をする時に窯内からの熱風をまともに受けてしまうことになります。

炭焼きの際には、窯口は土や石などで広げたり狭めたりします。その時に石がひっかかる場所を作るのに、大谷石だとナタで容易に削れたので、そういう点でも好都合でした。

窯口を渡っている石は「ひたい石」と呼ばれ、石屋さんで大谷石を削って作ってもらいました。窯を支える一番大切な石です。

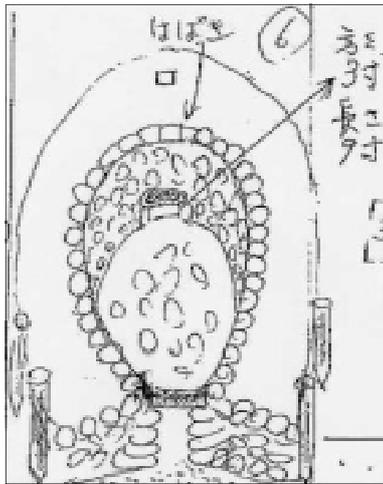


埋め戻し1

瓦のサンドイッチを積み上げたところまで土を埋め戻します。

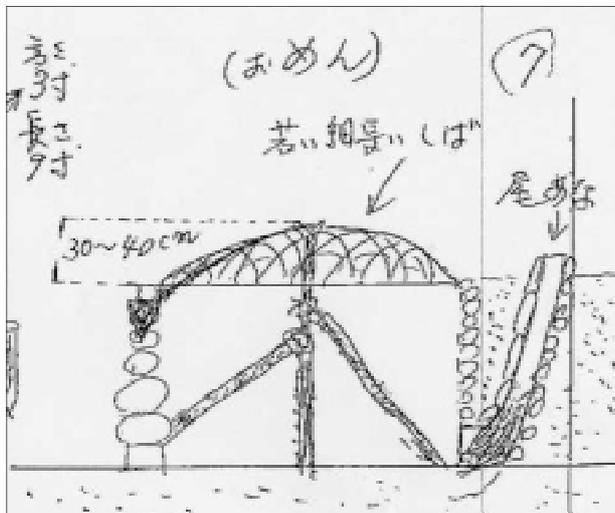
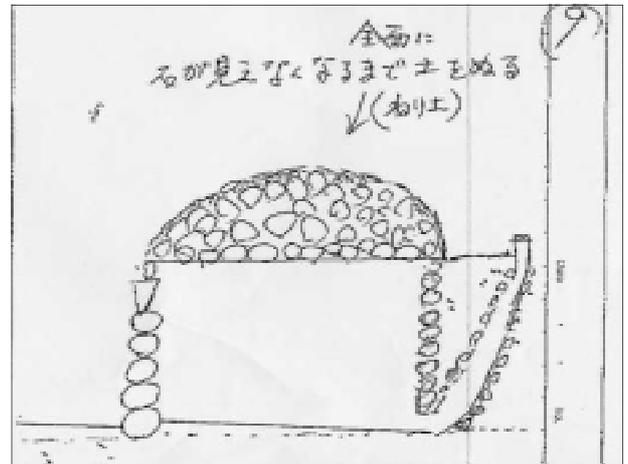
おめんづくり

直径5～6センチの若い生木を80本ほど集めます。床面中央の最頂点が窯口の基準より30～40センチ高なるように、ひもで木を結び、床面をく横断する木はしならせて亀の甲羅上に組んでいきます。



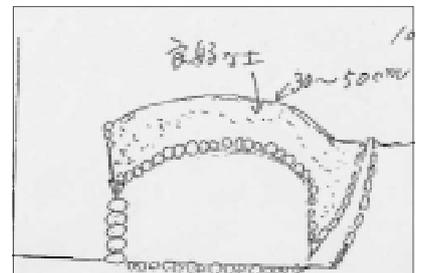
土塗り

隙間に土、瓦を小さく割ったものを間にはさみしました。こうすることによって、土が締まるとともに、瓦同士がお互いに支えあって、とても強固な窯頭となるのです。



埋め戻し

窯周辺の土は埋め戻しをするのに適したよい土でした。

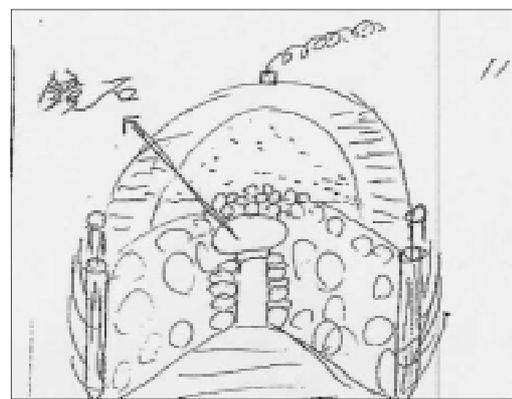
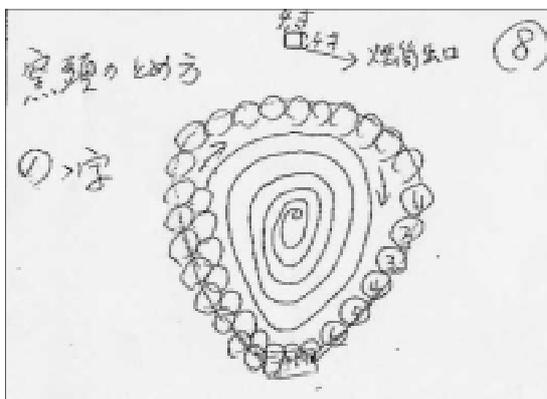


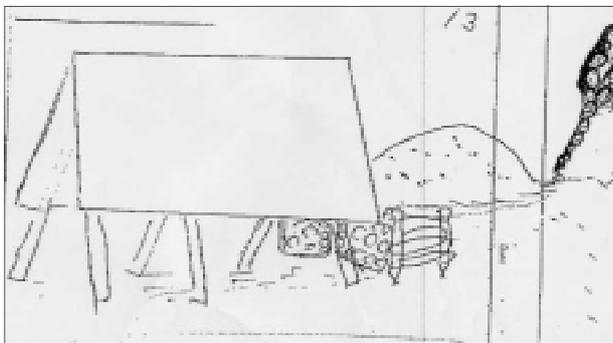
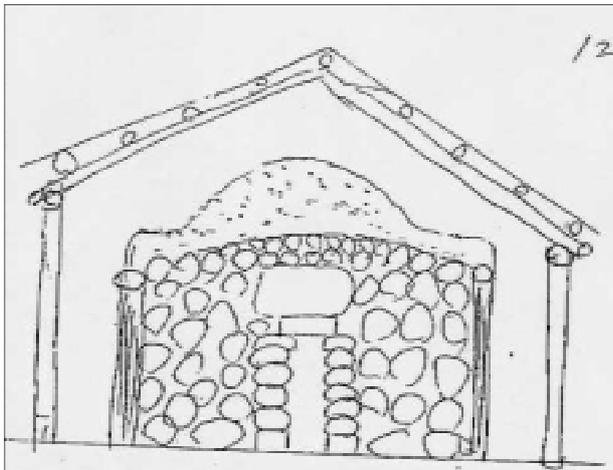
窯頭のとめ方

窯の縁周から、木でつくったお面上に瓦を1枚ずつ順番に1周ごとに最頂点に向かって並べて行きます。ここでも土をつなぎにつかって徐々に中心の最頂点へ向かって瓦を置いていきます。最後の方は、瓦まるまる1枚だと大きいので、少し割って使いました。そして、最後は、地元の大きな「みとげ石」を載せて完了！。

空焚き

土が締まっていきます。若干叩いて締めます。窯内の天井から30~50センチになるように土を盛ります。使用していくうちにどんどん土が締まるので、使用する度に土をかけることも必要。





作業環境の整備

続けて炭を焼くことを前提として考えます。焼き上げた炭を土をかぶせて置く場所と次の炭材を置く場所を考えて作業スペースを設置しなければなりません。炭焼きの道具を置く場所も考える必要があります。特に、焼きあげた炭を窯から出す道具は、使用中には高温で危険なので、柄の部分を立てかけられるような鉤を設けました。

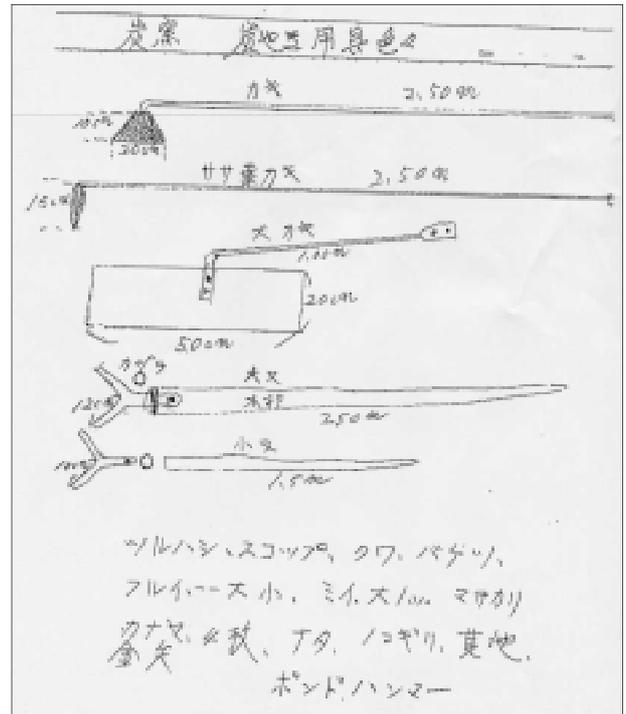
魂入れ

空焚きをした後、一番最初の立て込み、火付けの前に、安全を祈願。窯の口の上に2本竹を差し、塩で清め、日本酒で一杯。

炭焼きの段取り・道具の使い方

大又

炭材を立て込む時に使います。立て込む時は、空焚きもしくは前回の炭焼きの余熱が熱いので、これを使用して立て込みを行います。大又は奥へ立て込む時に使用。奥へはよい炭材を入れるようにします。木が生えているときと上下逆になるように、立てて立て込む。



小又

炭材を立て込む時に使う。特に、入口付近で使う。

ササ葉カキ

真っ赤になっている炭を窯から出すときに使用します。原形をとどめている炭をひっかけて横にしたり、窯口付近へ寄せるときに使用。

カキ

窯口付近で炭を寄せるのに使用し。

大カキ

窯から出した炭の火を土で消す場所へ移動させる時に使用。

土

窯から出した炭の火を消すために使用。何回も使用しているうちに灰も多く含まれてきて使い勝手がよくなってきます。

角スコップ

土をかけるのに使用。

鍬

土を寄せるのに使用。

ふるい

できあがった炭を袋づめする時に使用。直径50センチ以上で粗めのものを。土ごと炭をふるいにかけて。

その他

ツルハシ、スコップ、バケツ、み、マサカリ、ナタ、のこぎり、ポンドハンマー

白炭窯づくり 親方の独り言

材料集め

こんな石のないところは、困ったよ。さて、どうやって窯をこしらえたらいいか苦労したね。石があってもぼろぼろくずれるからね。いやー、こんな石のないところには困ったよ。

土建屋の資材捨て場からU字溝の蓋などをさがしてもらったけど、杉浦さんは見つけるのが美味いね。おかげで、床ゆかは凸凹がなく平らにしあげることができた。うまい具合に廃材が集まったから、入り口の所の大谷石くらいしか購入せずにすんだものなあ。

石屋さんにももらった石も、少し横長だったけど煙突の入り口にするのには都合良かった。普通は石をいくつも使って作るのだけど、具合よくつくるのは難しいんだ。

瓦もよく集めたね。石がないからどうしようかと思ったけど、都合よく集めてくれたものだ。

土は粘土質が強く、どうなるかと思ったけど、窯にするのにはよかった。

窯製作

いやー、石がないのでどうやって窯を作ろうかと心配で心配で、はじめの2日は眠れなかったよ。ホント、最初はすぐに自費で帰ろうと思った。

責任をまっとうできてうれしい。自分ながら感心し

てしまった。

ここで白炭窯をつくれれば、どこでもできる。ここで作るのはウルトラCだよ。

土の特性を見誤った。粘土質が強いので硬くなる土。ねばりがすぎて窯をつくるのも大変だった。それと、収縮がはげしかったね。通常より10センチ余計にみたけど、もう少し必要だったな。

瓦は形を作るのに使いやすかったね。いいアイデアだった。土の収縮にはビックリしたが、この土と瓦で頑丈な窯を作ることができた。

この窯は素直な窯。人間の操作通り、いうことを聞くからね。

今回、皆さんに喜んでいただければ、何も言うことはない。

粘土質の土、瓦利用の窯なので、これまで作った中では、一番よくできた窯だ。

感想

瓦を利用した窯は白炭窯には、いいね。熱しやすく、冷めやすい瓦は、空焚きしたあとに冷めやすく、低温での蒸気乾燥に適しており、また、炭焼きをするときは一気に加温できるので、ものすごく適している。

炭を焼くするには、道具の目立て、木の伐採などの技術も必要だよ。炭を焼く技術の前に、そういう技術も学んでください。炭材を窯に立て込む時のコツは、細いのは束ねる、太いのは割ります。それと敵機の木を伐採して、森林の維持にも取り組んでください。

おまけの利用法

炭焼きの窯出しをした後の余熱を利用して、色々とクッキングを楽しみました。

ピザは、30秒で食べられる状態に。カリカリの場合は1分で出来あがり！

卵は穴をあけて入口近くに置いて、1～2分でゆで卵に。サトイモの着ぬかつぎ、トースト、酒粕焼きなどなど。

せんべいの空き缶に椿などをいれて数分で鑑賞炭にもチャレンジしてみました。

炭そのものだけでなく、その他色々楽しめることができました。

地域新エネルギービジョン実施報告

岩手県湯田町

平成11年10月20日～平成12年2月29日

東北電力グループの東北緑化環境保全株式会社からの委託事業（共同事業）を受けて、平成11年度、岩手県湯田町の地域新エネルギービジョンの作成を、湯田町と本社、里地ネットワークの共同で行ないました。

地域新エネルギービジョンとは、

化石燃料依存型のエネルギー政策を、地域内に眠る自然エネルギーや、ソーラー発電、コージェネレーションなどの新エネルギーへ転換するためのビジョンづくりです。このビジョンの特徴は、他のビジョンとは若干異なり、具体的な導入計画を策定し地域内に啓蒙啓発を行うことを主眼としていることです。ビジョンで策定されたプロジェクトで実行性のあるもの、先進的なものについては、ビジョンの策定に引き続き、経済性分析や導入に向けた諸課題の解決に向けたフィジビリティスタディのための予算が準備されていることも特徴の一つです。

この背景には、COP3地球温暖化防止京都会議で、日本の温暖化ガス排出抑制の基準数値を、2008年から2012年までの5年間で、1990年度数値の6%削減を行う決定があります。この6%という数値に関しては、日本の化石燃料の総使用量を考えたとき、国際バランスがとれているかどうか議論が分かれます。しかし、現在の私たちの暮らし方、企業活動の状況を見るかぎり、化石燃料への依存体質に大きな変化が見られないことから、この数値さえも達成できるかどうか懸案となっています。

そこで、この対策の一つとして、都市だけではなく全国の自治体において、化石燃料依存型の産業や交通、厚生や地域活性化策、暮らしのあり方にいたるまで、地域のエネルギー政策の観点から早急に捉え直していかうという試みが地域新エネルギービジョンです。

地域には地域固有のそれぞれの気候風土や生業、暮らし方があります。風が強い谷、水の多い流域、落差がある箇所、雪が多い地域、地熱が高い場所、家畜が多い地域、製材所が多い地域、日照時間が長い地域、下水の温度が高い箇所…。古来からの日本の暮らし方には、地域固有の風土と資源を最大限活用した循環型の暮らし方がありました。そして、これから私たちが持続型の社会を再構築しなおすためには、かつての知恵を生かした新たな産業技術への転換や古くて新しい新たな仕組みを導入していくことが必要になります。

地域内に眠っているさまざまな自然エネルギーや、燃料電池、ソーラー発電などの新エネルギーの導入促進とともに、節電やエネルギー消費の少ない機器への転換を目指す省エネルギーの取り組みが、緊急かつ重要な課題として求められています。

あなた自身は、そして、あなたの地域ではいかがですか？

この地域新エネルギービジョンの策定は、別な側面から見ると、前号で簡単に紹介した「エコテクレビュー」の地域版です。エコテクレビューは、全国の環境保全に寄与している技術をリストアップしていかうというものです。具体的な技術の活用を、ひとつの市町村に適用した場合に、どのようなビジョンが描けるかという点で非常に興味深いものがあります。平成11年度は、両事業とも自転車操業状態で、走りながら考えるといった状況でした。平成12年度は、初年度の構築を元に、一方では、エコテクレビューの充実を図るとともに、もう一方では、地域新エネルギービジョンでの先進地視察を取り入れた地域内ビジョンづくりを行うことで、複合的な相互チェックが行えることと思います。

もうひとつ、これにビジョン策定の手法として、愛知県美浜町、三重県の市町村職員研修で実施している地元学の手法を用いています。この地元学の技法もさまざまな応用形態を構築中ですが、この基本は、吉本哲郎氏の「地元学ことはじめ」から一步も出ていません。実践しようと考えている方は、テキスト「里地」をご覧ください。

さて、前置きが長くなりましたが、地元学の手法で、集落住民との共同調査を行った岩手県湯田町の地域新エネルギービジョンの経過を報告いたします。

地元学手法による

「エネルギー探検隊」の実施

湯田町役場の企画情報課の菊池さんとともに、地元の方の案内で、地元を探検しました。探検は、まず、5千分の1の地形図を用意して、集落の範囲、集落の水源範囲内を確定させて、湯田町を18の地区に分割しました。それぞれの地区の区長さんをはじめとして地区で参加できる人を集め、集水域内を調べてまわりました。ただ、雪のため入れない場所が多かったのが無念です。風の強いところ、水の落差、家畜、温泉、廃熱、農産加工場、製材所、牛乳工場、…。自然エネルギーが眠っていそうなところ、住民の暮らし方、エネルギー消費の実状がわかる場所を訪ね歩き、白地図に書き込み写真を撮るといふ、いつもの基本作業を行いました。エネルギー消費箇所、潜在需要のある箇所と量などのエネルギー需給調査に加えて、地元学ならではの、地域の伝承文化、基層文化の調査もあわせて行いました。

この中から、かつての暮らし方の知恵、今後のエネルギーの需要可能性と需要箇所、新たな技術の導入可能性を見ていきました。1回目の探検隊の後、地元のキーマンを訪ねた第2回目の探検隊では、集落単位の文化から、地域連係をした場合の活性化の可能性や方向性などを含めた住民の意向を調べていきました。潜在的なエネルギーがあり、住民意向があるものについては、ビジョンへの反映と実施での検証が必要になりました。3回目の調査では、具体的なプロジェクトの可能性を模索してゆきました。

この3回にわたる探検隊を通じて、大きな白地図20

枚が次々に色づけられ、写真が貼られ、そしてコメントで埋まりました。「調べた人しか詳しくならない」の鉄則どおり、参加の度合に応じて、新たな発見や再認識の貴重な体験が得られたのではないかと思います。

湯田町のビジョンと今後

湯田町の地域新エネルギービジョンの理念は、「身近な温度差エネルギーを活したまちづくり」です。湯田町には、温泉、雪、そして、40年生のブナやナラの二次林があります。この自然の恵みと、温泉旅館の廃食油や温泉廃熱の有効利用が注目されました。身近な温度差エネルギーの活用は、地域の資源を最大限に活用した身の丈にあった施策であると思います。もうひとつは、牛乳公社におけるコジェネの検証があります。4月からスタートするHACCP対応工場が安定稼働した時期をみて、フィジビリティスタディーがかけられれば、湯田町内では大きな新(省)エネルギー施策になることが期待されています。この他にも地域活性化を目指した酪農テーマパーク、湯煙のただよう温泉街づくりなど、さまざまな案がだされました。いずれも住民自身の声を集めたものですので、外部から作ったり提案したものではないことが地元学の手法による特徴です。NEDOからも、地元学の視点からのビジョン策定は興味深いとお誉めをいただきました。

平成11年度ビジョンを実施した湯田町と隣接村であり生活文化圏を同じくする沢内村を含む西和賀地域では、今後、雪溶けと住民からの要請を待って、本格的な地元学を実施する予定です。ご関心のある方は、手弁当でご参加ください。

里地ネットワークが真に目指すのは、将来世代への付け回しにならない計画立案と実施です。地元の視点でしっかり足のついた、根も葉もある計画になるよう、平成12年度も、ビジョン作成を体力のある範囲内で、全国で数箇所実施していきますので、引き続きご支援ご協力をお願いいたします。

あなたの地域も新エネルギービジョンに手をあげてみませんか？

ちなみに、本年は単独受託と共同受託を取り混ぜて実施検証していきたいと思っていますので、事業パートナーの募集も行っています。

イベント・セミナーご案内

北竜湖・小菅の里プロジェクト

(財)イオングループ環境財団と里地ネットワークと地域による里山保全活動第三弾が下記の要領で開催されます。森の小径の整備や下草刈りなどの整備。それから得られた樹木で遊び道具の制作。小菅の里の人、味、文化も盛りだくさん!

日時：4月15日(土)～16日(日)

場所：長野県飯山市・北竜湖畔

主催：(財)イオングループ環境財団・里地ネットワーク・小菅むらづくり委員会・小菅の里協働楽舎

申込・問合せ：文化北竜湖山荘(鷲尾)

TEL0269-65-3121 FAX0269-65-4515

日間の日程で行う予定です。

問合せ：里地ネットワーク

TEL03-3500-3559 FAX03-3500-3841

雑木林と遊ぶ教室

雑木林を探検し、雑木林マップ作り、山菜採集・料理を行います。雑木林管理の実地講習も行います。

日時：4月22日(土)・23日(日)

場所：波見の里センター(京都府宮津市)

参加費：1000円、別途宿泊・食費：3000円

問合せ：地球デザインスクール事務局

(担当：広瀬)

TEL075-417-3147 FAX075-431-8376

げ・げ・げのげプロジェクト

里山倶楽部

～弘川寺の妖怪たち～

「弘川寺 歴史と文化の森」にササユリを増やしていく活動、そしてその管理を年間通じて行っていくためのきっかけとして、妖怪を基本テーマとしてイベントを行います。

日時：2000年4月23日(日)朝～夕方

場所：弘川寺(大阪府南河内郡河南町)

連絡先：大亦義朗

TEL & FAX 0721-63-3647

第8回環境自治体会議「水俣会議」

地元学の実践をはじめ、里地ネットワークと多くの活動をともにしている水俣市で下記の要領で環境自治体会議が開催されます。

主催：環境自治体会議・第8回環境自治体会議水俣会議実行委員会・水俣市

日時：5月24日(水)～26日(金)

<分科会テーマ概要>

- ・住民参加と協働のまちづくり
- ・環境自治体づくり
- ・資源とエネルギー
- ・環境教育
- ・中山間地域の振興と流域連携
- ・生活現場から

申込期限：4月24日(月)

問合せ：水俣市役所環境対策課

TEL0966-63-1111 FAX0966-63-9044

地元学実践

地元学の実践を下記の地域で行います。お近くの方、地元学の実践をしてみませんか?

場所：岩手県西和賀郡(沢内村・湯田町)

日時：日程調整中ですが、4月17日～30日の期間に2